繪本豊臣勲功記

九編

八

へ 遠 13 部
2209
88

繪本豊臣勲功記九編巻之八

目録

殿下奇兵大従閑道乱入

附正兵進殺

家久真服告意義徹長老

附長老調和

特 へ遠13 2209 88

殿下降二旧洛津一㳞軍凱陣
附 新納獨立
義弘瞋二禁止國中一向宗一
附 上洛仕官

絵本豊臣勲功記九編巻之八

殿下奇兵大従ニ閑乃乱入 属 正兵進殺

櫻澤堂山 删補

旌を万里の外に懸て。威を崑崙の西に揚とハ陳子公を賛せる雄向の才薫なれども。恰も是公が西征に的中せり。さるほどに佐く成政自己が勇気に矯慢して遂に鴻津の罠に陥り苦戦骨を刪せる事ハ。素殿下にも己を遠窠し玉ハざゝんにハあらむぞ。よく猛虎ともて猶として。炮矢を防がしむるにぞん今ハはや敵軍の鋭気十分に弱まりぬれバ深遠無底の謀計を行ふハぞやと思召され。諸将に神策を授られ。奇兵をもつて閑乃より。鹿兒

島の城へ攻近づかんと。搦手の諸将加藤左馬助。九鬼大隅守。脇坂中務少輔。其外平野遠江守。糟谷内膳正を案内者として五万余人指副られ密に獅子島へ渡さんと。彼門徒等に導きをさせ國人すら知る者まれなる。岩窟の波るを經て難なく獅子島へ越と居甚より五万を二方に分て鹿児島の城下へ推進んとせり。偖又島津義久ハ謀計全からずして焼討に敵の士卒を二三百など討得さるのミ名ある将士ハ一個も撃ねバ扼腕ふかゝりしといえども詮かたなきゆえに再び軍の評議に及び。諸将の異見を聆ところに新納ハ勇気凛々として只戦はんことを勧め伊集院ハ智理漫々として守らんことを勧めけるにぞ義久もはじめ諸将一同伊集院の異見を用ひ。険阻要害の地に據て守るべき評議に定まり。鹿児島の城外を一里余にして泰見山前に出張す。其も島津家の陣織といつぞ先鋒の左隊伍にハ新納か軍勢五千余騎同じく右隊伍にハ伊集院の五千余騎。扨中道にハ種島町田の両隊伍一万余騎。本陣ハ外面の惣大将。島津義弘も是に属する旗本にハ左衛門佐俊久右馬頭謁久川上左京亮松尾平人侍一万六千有余人隊々部々厳凱にして蟻窺牧遊の虚隙もあらねバ。いかなる勁敵の進るあるとも容易くハ攻拔るまじと成ぐさくこそ見へにけれ。然るほどに秀吉ハ麾下の五万余騎二方に領列て進発

豊臣家の奇兵岩竇の間道より船を通じて義久父子を驚殺せしむ

あるに当時ハ天正十五年五月九日甲夜の事にぞあんなる。味方の勢ハ興正寺が門徒の者に案内させ岩窟の嶮岨を経て暮に紛れつゝ推進めバ。陸地の諸将ハ時刻を延べし。乙夜の月の登るをまつて同じく門徒に導きさせ。其辺とも知らぬ山径を密て潜々と推進る。加藤清正かねて殿下の命をうけ。紙旗指物を夥しく用意して山伝に行ことなれバ。途々小高き所の樹木にハ。件の旗帛を結付寄兵となせバ。右の方より進む者ハ。福島池田黒田父子。これらも殿下の内意を受て同じく路次の樹木の枝に旗指物など結付て。終夜道を経て暁方にハ伊集院が陣の後なる。右の山にぞ登りける。明れバ九日

の早天。寄手の進軍蒲生飛騨守。前田肥前守。堀左衛門督。三万余騎にて先陣に進めバ。蜂須賀阿波守。筒井伊賀守。堀尾帯刀中陣を守りて先手の威を助く。後陣ハ大和大納言秀長。紀伊和泉の軍勢を率し。関白殿下の御名代として進発ある。相随へる面々にハ小西摂津守。藤堂与右衛門。溝口加賀守。立花左近将監。有馬民部少輔。松浦式部少輔等前中後都て七万三千余人。大に武光を輝かせ。また正家の隊伍にして。厳然と正面より推進る。細路の殺所に到り。先陣蒲生前田の輩軍馬を止めて細作を遣はし。細作のこと軍中にハ何時もなくんバあるべから古の細ミちにしてはじめていざをふハあらざる節の様子を窺しむるに。奇斗伏兵ありとも見えね

ば。然らば進めと先陣しづくと廣路にいされば。中陣は細道の口を守て控へり。是搦手に廻りし奇兵が。敵の後より攻蒐り嶋津の陣中騒ぐをまつて急に進まんためなりし。此時嶋津方の総大将は。上方の勢が大軍にてあきらかに本道より推進るを聞て。ひそかに計策を謀合せ。まづ種嶋大膳は。正面の受手をなされば。しばらく敵を防ぎ戦ひ。偽負て退くべし。敵勝に乗て追来らば。新納忠元伊集院忠棟左右の山より打て下り。三方より取囲み一人も余さず討取べしと計略を設け。進みおそしとまつといえども。上方勢は中道の廣き所に陣を居へ。進来らざるがゆえに。偖は案内しらざるとみて。心に危ぶみ猥

に進まぬものならん最も然こそあるべしと嘲り笑て居るところへ。義弘の本陣より騎馬の兵鞭を揚て馳来り上方の大軍何地よりや廻りけん何十万とも数しれず。本陣に攻蒐り戦の最中なりと告ければ種嶋大膳を初諸軍一同に驚嘆なし。此を棄て本陣を救はん。将た此地を捨退ば敵兵それを幸として此道より攫投べきに。右やせん左やと軍議決せず南逃北惑騒動一向ならざりし。此に船方の豊臣勢は獅子嶋に着と等しく又万余人を三手に領ち。義弘が本陣の背所に出。そのうち平野長泰は一隊の勢にて嶋津彰久川上左京亮儕が陣を襲へば。糟屋内膳正は嶋津俊久松尾隼人が陣に撃投加藤

左馬助脇坂中務九鬼大隅守の三将ハ。義弘の本陣に攻蒐り。鉄炮火箭をしきりに放して。一番二番三番に揉ぐりしかバ。さしも剛毅の大将義弘。これに陸ふ精兵勁卒鬼神のごとき猛武者も不意をおそはれて驚惑ひ。或ハ天より降りさるか土中よりや涌生さる乎と狼狽迴り防戦の方便もあらに失ふて既に千万奔せり。此時山方を潜に進さる池田黒田の両寄名ハ賊の声を聞と斉しく。右より黒田孝高父子ハ。ひんがりより池田輝政おなじく発て喊を合セ奮然として山を馳下り表の方より本陣に突入るにぞ。いとゞさえ狼狽る島津勢何十万の敵名にや。果合る事もなりがたく。這般に逮で義弘も。おぬりの手に蓟果。

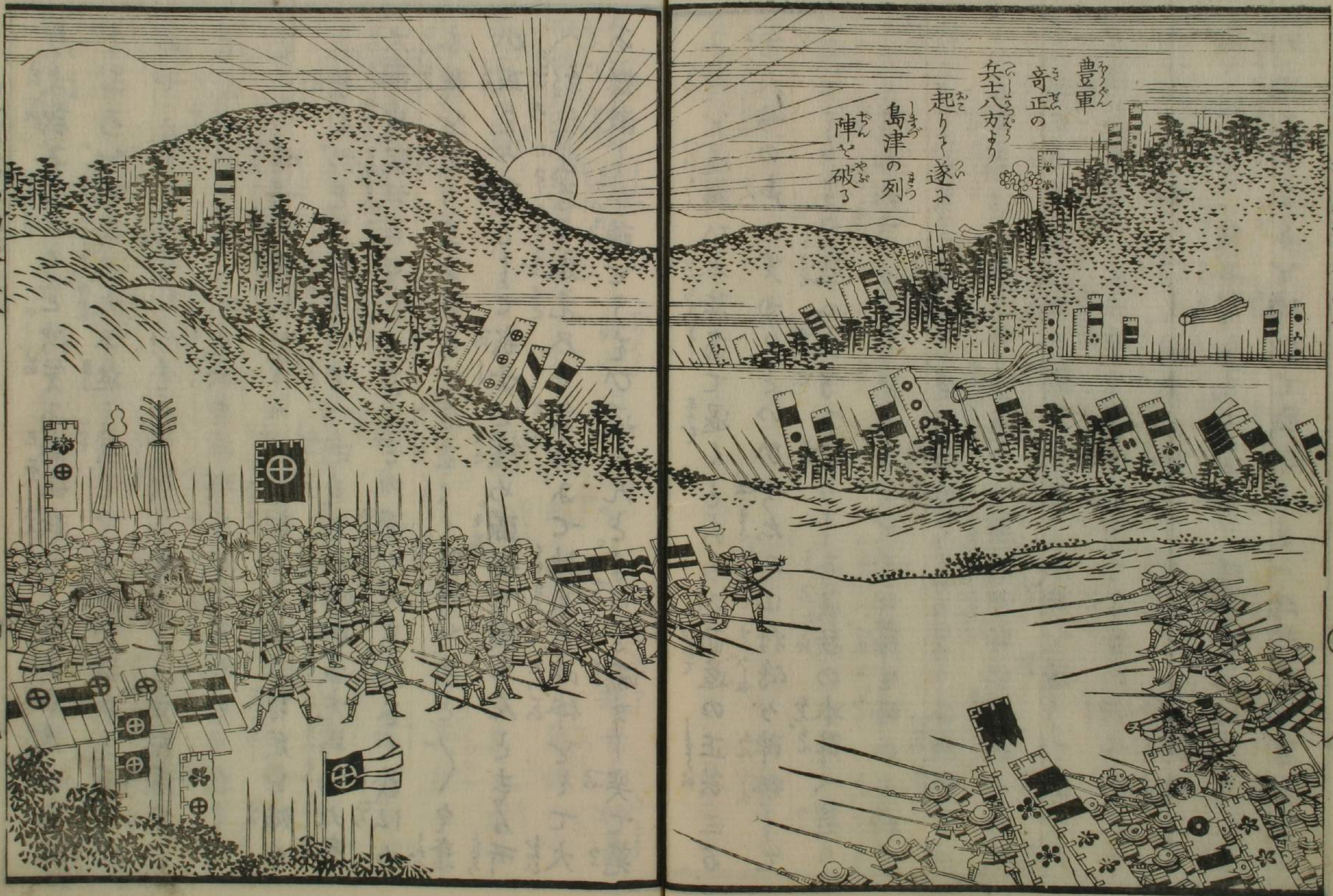
諸名に指揮せる術をも知らず。従名わづか四五十騎を率ゐて漸く一方を打破り。旗を棄ふて奔走せり。島津縄久川上松尾等今ハ防ぐに方術なく皆紛々と敗走しける。かくに於ひて上方勢ハ君もなくと分捕なさせて又新納伊集院も本陣よりの知らせにより最ともおどろけども互に名将従名等を騒がせず。先や本陣を救えとて。正面の敵を檀島町田に守らせおき馳出さんとせる所へ。前路を塞ひで左右より。伊集院が隊伍へハ福島左衛門太夫正則まつさく新納の軍中へハ。加藤主計頭清正烈然として突殺なし。先鋒の名声にて安将をやく塚巣セよ。廉児島の本城ハ快乗取しと知らざるかと嘲り笑

ふさ武蔵守怒れる眼光飛電のごとく。叫ぶ大音ハ鳴雷に斉しく猛風樹石を吹ちらすばかりの英威を顕はし。加藤が隊中へおて蒐り。一息三瞬なさぬ間に数卒を殴こと二三十。おもふにおもて進まるが心ハ偏に本陣を救んとする他なれバ支る敵を追散し一路をもとめて馳けるを清正眤と睨るよりも。そづうる正斜に追蒐来り逃るな返せと声かけらるも忠元聞て怒をなし取て返して只一撃と近付来りてよくく見るバ先日千代川にて落馬せし時助けらるる清正也元信義に心撓まさもて此敵にハ又向もるじと素より本陣に心せくもえ穿ひにして加藤を振棄飛がごとくに馳去りり。

主計頭ハ是非なく。徒労を烈まし下知なして。跟を追てぞ楼立より。右の方にハ福島正則侍集院が陣を襲殺しけるが。元来仁慈を旨として威勢を示し服さしめんと計らせ玉ふ軍なれバ猥に士卒を殺さゞるやう。諸将に命じらる事也え猛勢短気の正則も。只勇慎とえセさるのみ也え侍集院も一方を斬抜。只頼本陣をさくまんと。島津風の伏蟠ともて。此谷彼谷に残し置。本陣高て退去りり。正則手勢を下知なして単騎急に追蒐けるが。新納侍集院が残しける蟠伏の兵卒こゝかしこに踏留り。茂林岩窟にひそみ居て。追来る福島加藤が兵と。そゝうゝ戦ふするまとそくなうるぞ是一人二人ぐらひかくもいて追来る敵とうつ

ありことさと嶋はぶりのかまりの徒こそ油断ならじと
などいふ志ぞく用ゐる事あり
て。茂林幽谷を尋探るに嶋津の強士潜在て鉄炮を放ち
ろるが。案内知たる者共なれば。そ家逸そやく逃去る也
え。福島加藤等指麾くも競進で追蒐たり。扨正面の道
上を護在たる種島大膳。町田出羽守なれ。本陣よりの較
知を聞といえども。蒲生。前田が諸軍勢推進来らん事を
おもひ。進退なりに迷ひ在所に。新納伴集院が陣中へも。
敵攻蒐りて援へ得ぞ。さや本陣へ退きねときこえたれ
ば。町田久信種島に通じて。自方の諸勢退取ると残く
のをまつを守るとも前後に敵を扶持ながば。いかにせる
とも詮やあるらん。ありぞくの外計議なしとて。にそら

に陣を退拂ひ本陣當て退くとあるに。面道の正名三万
余人喊の声の聞ゆるといひ今なお町田種島が陣拂して
退をとるより扨は山方へ上りし寄手敵の本陣へ蒐り
しと覚也。此方よりも進めやとて前田蒲生堀の三将諸
勢をはげまし突発し。その際近くなるまゝに鉄炮きび
しく打蒐てゝ後より攻懸るを種島町田の両将かれて
覚頭の手なればゞ馬の頭を立整し。後陣を退うつ敵を引
受放らしまじと血戦も蒲生前田も名誉の将なれぬる
りなく下知を傳え四角八面より突入るを堀秀政ろし
てく指居し旗本勢を左右に亘し。横鑓を入つゝも。氏々
利長正斜に手を捧ひて戦ひければ。嶋津の軍勢三方よ


豊軍
奇正の
兵士八方より
起りて遂に
島津の列
陣を破る

り大敵に揉立られ。次第に隊伍散乱して。兵卒僕に成る
ところを秀政大に進み甚とや自方へ勝色なるぞ進
めやくと呼はりけれバ勇気に誇りし上方勢鋭立て
花風のごとく掛立攻立縦横無辺山谷林野も振なして
ぞうり喚呼で烈戦せしかバ猛卸りし薩州勢足を溜り
ね共くづれに本陣の方へ逃走る。此時加藤左馬助。九鬼
大隅守。脇坂平野。粕谷なんどの面々ハなんなく義弘の
本陣を破りなお残兵を追立く。陣所をことごとく乗
ひ取れが陣として兵士を纏め。隊伍を固めんとせる所
へ。新納武蔵守忠元又手余諸にて馳来り。此体をミて大
に怒激し。本陣をうばひ返さんと。手勢を励まし突て蒐

るとも是ハ準備せし鉄炮の手練をもつて。追散せと加藤
脇坂九鬼平野粕谷が手より一同に放懸る鉄炮ハ。さ
ながら霰雹のごとくにて面を向べきようもなく進そ
がさく控えさるうちに後の方より加藤清正突然とし
て追来り新納が兵を中に提あめ酒をまじと揉ぶる桐
ハ。今こそ新納が軍勢を鏖にせん為色なれ忠元心ハ鉄
火の如く打死して猛勇を残さばやとおもひけれども。
義弘が安否も知れざれバ本城もいかゞにやとおもえバ。徒
に身も棄られざれバ落延んにハ如べからずと馬に鞭しく
拘入れて縦に揉り横に拂ひ。辛くも一條の路を求めて。
鹿児嶋の方へ落行けり。跡に続て伊集院町田。種嶋の人

人も。次第に本陣を目当て来れど。早くも敵に奪ひ取れ。それぞかりしハ左右の山上峯より峯へ推つゞきて幟旗物を翻めかし。其勢何十万とも知れねバ。勇気勝れし将卒も驚愕なして途を失ひ。今ハなかく猛威を振ふひ。必死になつて戦ふとも。勝べき程あらざるべけれバ。兵卒にて戦死せんよりハ。一先こゝを遁去て。主君の安否を伺はんと。おもひくに活路を求め。山陰谷間を潜走して本城の方へ落行けり。こゝによつて清正秀政進まんとする自方を制し。まづ此辺に備えを固めて。御本陣へ注進をべしと。軍使を馳て太平寺へ合戦の次第を言状を殿下備に聴しめし。即時に急使を差ささせて諸将

へ御下知ありけるよう。敵の陣所を乗取らへハ。各うぞひし陣々を固めけつして兵士を励ますべからず。兼て本城康児将へ。攻落ること無用なり。此方より指揮なれうちへ。自己の働きをべからずと厳密の上意なり。依て諸将ハ命令のおとく。皆それぐに陣営を固め。先隊の陣より太平寺まで十四五町がそのあいだ。諸将の陣営碁るのおとく丸に順に備えより彩ぞらりに要崖の地と楽取り。持固めさりけれバ。今ハ康児将の本城も風の前なる孤燭に斉しくその危ふきこと旦夕にあり。かの弥にいよりて先達に降参なしける九州の諸家ハままも殿下の神智におうんど。心魂まつさく恐彼しけり

家久真服告意義徹長老　属長老調和

波なくんバ江海湖沼の名別と覚え。江濤よく水の威を示。威なきときんば江海の名あるが故に人よく恐怖。此海にして一大鯢と漁網もの〻既に日俄て降参しける時津中務家久なり。素より中に隊りし心ハ幸聖義久の計議を助けて反間となさんとたもひけるゆえ大統にも殿下とそしかたてまつり。諸将を欺き在りける所に思ひもよらざ大祚通の妙計をもて。いつの間にか宗近より。諸将深くと乱入なし時津勢を大に敗り。諸所の陣営厳重にして本城の危急さながらに。大磐石下の累卵より。実に家國の大半なりと見もし安

もしつるによりて将の家久心魂も惑溺するまでうちおどろき。心中さながら悶苦といふばかりせんと呂猶子辛万苦の思ひに沈む時に大将秀吉公此体を御覧あり。何となく諸将を召され茶などを賜りける時に黒田浅野に目配を長政かねて江内意と蒙り在けるゆえ進出て言状そ〻く痛むべし時津の滅亡眼前にあり。おもまでさぐく怨にさせたまふといへども上意に応ぜざる防戦におよぶ。斯のごとく成果しへ自業自滅といひつべし。今いえや猶豫ましまさん所にあらざる。此時もえやく諸軍に命じ。鹿児島の城を踏破り。九州一統に平均させたまひ東國の軍務を急がせたまふこそ然るべけれと言をと殿下

聞しめされ更に志も忘れざるを。黒田孝高其ときを
すゝみて。いまだ東國も治に入らざれば。此地に長く御逗
留ましますこと。御思案なきに似るべらずや。まづ島
津家隊の事は。あれまでも意地を立抜威をあらそふ
などの心底なれば。忽ち心を革めて帰伏すべきなれども
まだ。既に九分は攻遁されば。鹿児島の一城を攻陥さん
こと。只今日はるをべからず。斥時もそやく攻落るべく
御下知あらまほしく侍と詞を尽して諫争せり。殿下さら
に御承引なく。小刻黙して在せしが。座中を静に見やら
しまひ。浅野黒田がもうす所一応の理はありといへど
も。これが所存とは格別なり。今両人が言をおとく軍を進

めて攻させなば。義久父子に自害させ。鹿児島の城を取
得んこと。最も易しといふといへども。島津の家系は古
来より。これまで数代相続して。武威を損さず義を磨き。
四百年来連綿たる。各家を一時に亡さんこと。予が本
意とせる所にあらず。此威に乗じて攻潰さば。後代まで
の誹謗を受けん。またさる天子の勅を蒙り。四海静謐さ
らしめんことを好む。我ふたゝびろなしといへども。義久
帰服せざるに因て。止ことを得ざる所なり。帰すべきも
のは士卒までも。安穏ならんことを望めり。島津が如き
剛義の武士は。仮令ともて服さしめなば。ふたゝび変ぜ
るものにあらぬぞ。天下のさめにある家なれば。備へもつ

て立安さふ存ざるあり。許して益なきものなれバ。累代の名家たりといえども。浩る時節を幸ひとして。根を断枝葉を枯をべきに嶋津家におひてハ左にあらず素より貧賤の家より起り。たゞに至るの身なりけれバ。義久一箇の所存をもつて煙んざるも理りなり。然ども天下の帰する所を弁えず。和と理と時とを知らずして。敵對ものハかなはざ亡びん。其理を朧に知るものハ。自然と降服するになん。是いさゝかも武威に驕らず。非義の軍に戦はず。降る輩をバよく悟さしめ速に四海泰平を願ふの外他念なし。誠に天道に称ひなバ。数日留軍するといふとも。東國あるひハ上方に。よも変乱ハあるまじと。仁

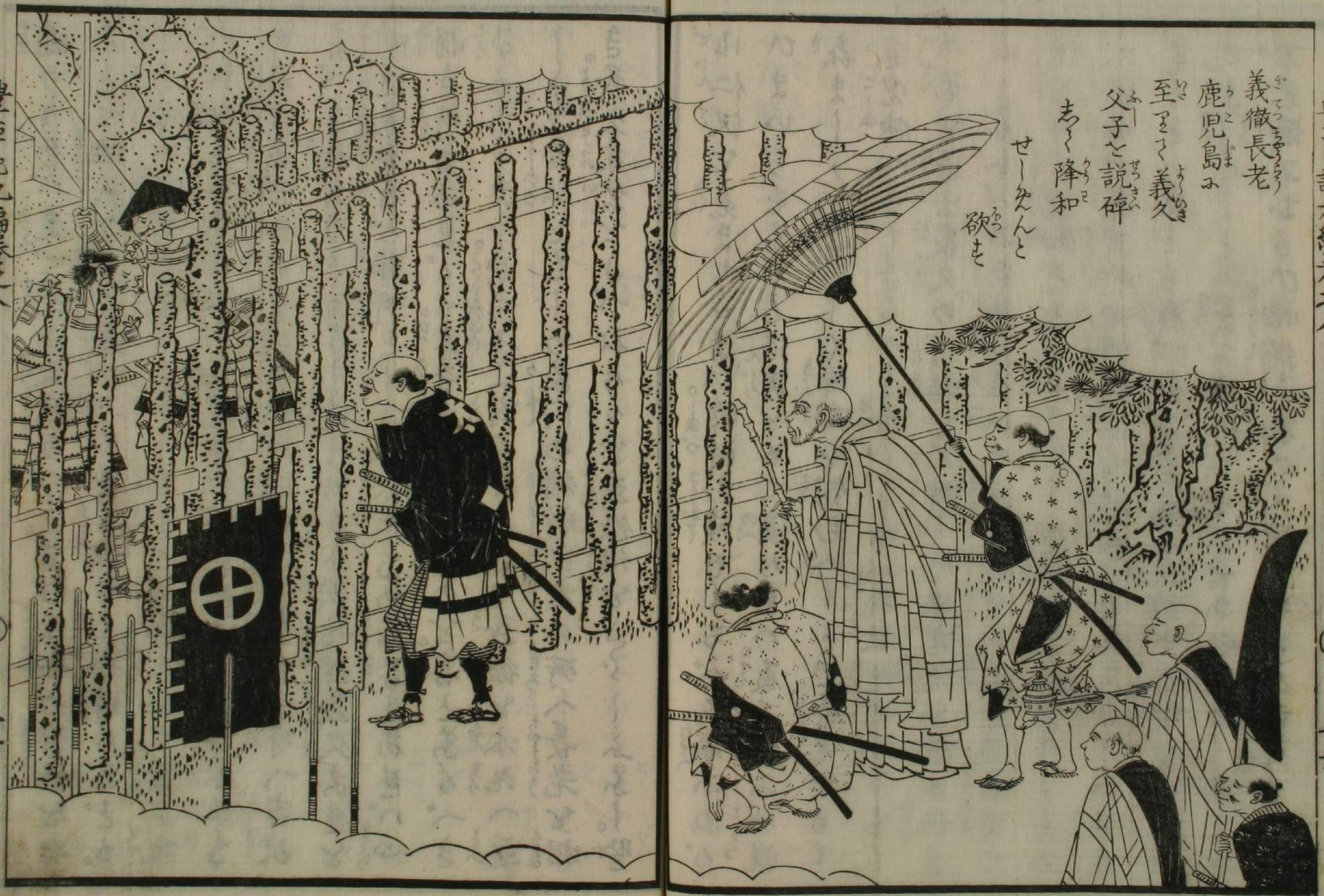
義を殫して宣ひけれバ。長政孝高其餘の諸将も。斉しく感涙止めあへず。実に広太の御仁沢。此上ハ何をもつてか言上べきやうなしと。頭を叩て感佩す。此時嶋津家久も傍に在て始終を聞秀吉公の浅からぬ寛仁高義の御心に感じ。骨髄に徹してありがたく。今更敵對せしことを。そゞろ恐しくおもひ返し。甚く後悔至極せり。華て本心に降参せんと思えども。義久義弘の心底も識ざれバ。何とぞ殿下の御仁心をもうしきかせ。帰降させんとはいへども。通ずるに使を得ざれバ。左や右と案じわづらひ何気なく御前を退き。太平寺長老義徴和尚に對面して密にもうしいでけるよう。抑も當山ハ薩州

一の禅林にして。島津家の祈祷所なり。然れば今此刹に臨み國の危急を余所にみさんも本意なるまじ。且家長久さゝんこと尊宿にも悦ばしからん。こゝをもつて君僧と共に辛苦をいとはず。静謐の事を計らせさせ給ふの心あらば。吾今尊宿の力を借て。島津家長久を計らんとす。御所存いかにとありければ。長老叉手して仰までもひらそぜ。此國歴然として在ばこそ。此寺もまた安在せり。島津家栄え玉へばこそ寺中の僧徒も飢渇せず。然ば何ぞ大守のために。粉骨砕身なさんこと出家も武士も義は一なり。愚僧が做得ることにしあらば。いかなる辛苦も厭ひもうさぜ。御所存のほどを仰られよ。兼聴らんと

答えければ。家久大に欽悦なし。其心の程満悦せり。今は何とか隠すべき。吾今日まで秀吉公へ降参せしは偽りにて実は殿下に近づきまゐらせ殺害すべく存念なりしが。熟く深慮を廻らせば。天命補佐の秀吉公。所詮敵對叶ふべからず。殊に寛仁高義なること夏禹殷湯にも勝れべし。其と見もし聞もしをるによも凡人とはおもへず。其をあざむいて偽言せんこと。毛骨竦然として恐あり。其の上は実に帰服し國家の乱を平均なさんと存ぜといえども義久父子に言入るべき便宜を得ず。此ゆえともて尊宿と久敷好む所あり。辛労ながら殿下に乞て島津家和睦の許をうけ。義久父子に利解をのべられ降

気はさゝせ給はゞ。此上もなき歓びなり。某もまた自筆をもて一封の書翰をつかはさん。返すぐも侍り入とおもひ入て言させたるゆえ。義徹長老即地に肯ひ。殿下の御前に罷出おそるく言状なしく御自方の軍の勝利に因て。島津家の滅亡ほどく近ふ覚へ。此当寺へ島津家興立の精舎にして。国恩もつとも厚かりけるに。寺中の僧徒おしなべて大檀那の滅亡を見るに忍のびず。出家の身ともて軍中の往来も本意にあらねど。何卒殿下の御免を蒙り。鹿児嶋の城中に到り義久父子に理解を示し実意をもつて降参いさゝせ。ふたゝび発心なきやうに国家安穏を祈らしめ存ずるなれば。按也

御仁沢を恵ませたまひ。島津に相続せらるべく偏にねがひまいらせなりと信実をもて演たれば。殿下殊に御悦喜ましく。よろしく帰降を勧むべしとて長老をもて鹿児嶋へ遣さるべう命じ給ふ。義徹歓悦限りなく。御前を退出家久の書翰を所持して鹿児嶋の城に赴きぬ。さるほどに兵庫頭義弘は速く城中に逃返り。自方の諸勢の生死知れねば。しだく心魂をなやましところへ。新納伊集院町田種嶋にも馳来るゆえ。少しは安堵なるといえども。再び戦ふ勇気も挫け。上方勢を玉人共の手引せしとは夢にも知らず。不意に乱入せしほどに。不思議におもひ悟得ず。敵の大軍もや已に城外ちかく



義徹長老鹿児島に至りて義久父子を説砕して降和せしめんと欲す

逼りたれば定で急に攻来るべし。まづ防戦の準備をせんとて炮矢を多く運び入て。幔幕砲りしつ待けれども。上方勢は諸所の敵所に固く陣取せしのみにて急に攻べき体にもあらねば。不審におもひ在ところへ。太平寺の長老義徴和尚案内に依て城中に入来り太守へ言上すべき義ありともうし達しけるに。島津義久これを聞。近来秀吉が陣所としける太平寺の房主とおもへば。心悪き所もあれども。平素出家なるものを害するべきことにもあるまじ。快く呼入よ。対面せんとて義徴を本丸へ通しける。義弘をはじめ家門の諸将。列座の所へ長老を招き。義久来意をたづねらるゝと。義徴詞をさゞしふ茶し。堅

衲今日来城せし事。国家の安全を憶念してなり。這に禅悟と武覚とは似たると一語もりてそもさん乎。それ天に順あり人に逆あり。是に属せるに空色あり時をもて空に和をまれば。人道よく運耕し逆を将て色とうてば。鬼道もあれと瞋るがおとく。天下泰平ともて無一物の境に置ん欲羨に秀吉の公におけるか。神智不思議の器にして。無一物の境に遊び。天下泰平の七分を得さるに唯その天時を受ざる輩へ。島津家の一方のみなり。華に当時の世機を恵るに。秀吉元来卑賤に生出て甚身大海の一粟に似たりしも。よく天命に応時せしにや。その剣弱の諸侯悉く攻彼をこれ色を将て時と和し。空の無

礙界を掌にまさるが故なり。然るに當家ハ往昔より。武威
を減さず譜代の名家ありといえども纔に時機を察ら
ずして秀吉に款し給ふ。吉も天命の順逆に辨せざる
に似たるなるべし。只欽和睦を乞覓め國家長久万民安
寧のことを念ふは天下の大義にひらかれぞや。一旦夕の意
地を張ふし身命を軽んじて決戦するハ。勇のみにして
仁義に疎なる匹夫勇缺仁の公におひてハ。遂に國家を
滅しなん。四百年来相續く四家を。此時にして亡さん事。
祖廟への不孝言も不足る罪やハ有らん。野納の如き
世を捨る無門無物の水雲軀さへ。國家の亀鑑ハ患苦に
なんありまして国主の御身にあたるや。勝くハ我を弃。

勇を抛弃て安國全家万民安楽を専念ましまし。快く和
を乞降り玉えぶ。天道にも称ふべく人倫にも応ぞべし。
只唯此理を勧めまゐらせんために不得ず入座しはべる
なりと真理を竭して演説しけるも素より禅に不賢哲
なりける義久父子。ならびに伺候の諸将達まで。此語一
一心魂に通徹して。遁に面を覿合のみ言句も発さでお
りけるが。良あて義久父子長老にむかさるやう。方儻老翁
者の教示ところ至理に覚て感佩せ。然ども武士の所行
にして。一端意地を立徹らんと。幾戦場を桃合。自方十分
に利を失ひ。咫尺の擔下に攻逼らるも。命を惜みて降参せ
しと。嘲辱せられもん朽憾さよ。秀吉こままで幾次となく。

使者を來して招くといえども。無礼に罵て逐返し。いよ
さらなんの顔あつてか降伏ふべきと笑らん。斯ならざり
し巳先にこそ和を乞順理もありぬべき。不方僅困屈せし
弱に迫んで降参せるは最も恥る所なりと言せを長老
顱を振り。其は遠謀なき一國の慮なり。原来こゝに不和を
議せるも島津家よりの発郊なるを。老君近来數次。和義
せられよと令ぜといえども。野衲出家の親例に羞て再
遷三遷辞退せしを。殊に嚴なる命令に國家法民の為とお
もえ朦痴識を顧ずして。此に使せる所なり。こゝも秀吉
の命なれば。渠より勧進降参ならずや。何ぞ屈身策を
る降人と一様ならん。剰や秀吉島津家を発端より滅亡

きん所念の更に御在さず。陸分懇切の料理なるを。快く
降和ましまさべし。野衲もなどか國主の君かならぬ事を
勧むべき。先や所念を決し直ちへと操返こし道理を強
て言されたる。義久に剋沈吟して。諸交の顔色現れつゝも。
和尚に向ふて詞を和解國人を念ひ吾をもひ。無我言
実の異見の法語いとも尊くおぼえそべる。義久においては異心なし。義弘はいかにぞやと又の作せに兵庫頭。
長老の言理吾意に愜へり。然はあれども這に一箇の障
遮るべき事のあり。先頃降りし舎弟家久は兄なを欺の
陣中にありて。吾儕が約せし。計議を行ふものなからんと。
いふ語を聞さで義徹長老家久が寄さる書簡を出。こゝ

斯さば安否ぞ知るゝと掟を奉得て那時に披見しつ。
くゞ始終を読貫くに秀吉仁義の名将にして決ても
敵対すべくも覚えず。和睦ぞ万全の上策なるよし。子細
にことを書送りしかバ。彼是内外の事をもて再三諸将
に弾判しけれバ。降参ぞいと然るべしと各もく同論
されける。それがなかに唯独新納忠元のミ病気と称して
其の評聴に出仕せず。さればも与議一決して降参すべ
きに議定しけれバ。まづ義久のミ義徹長老ことを伴て。
殿下の御本陣に急ぎ行ける。此時義弘同隊せざるハ。なを
うさがハしく思へバなり。孫子に和睦の衆く潤熟な
さバ君臣悉皆降順すべき結構にぞありける

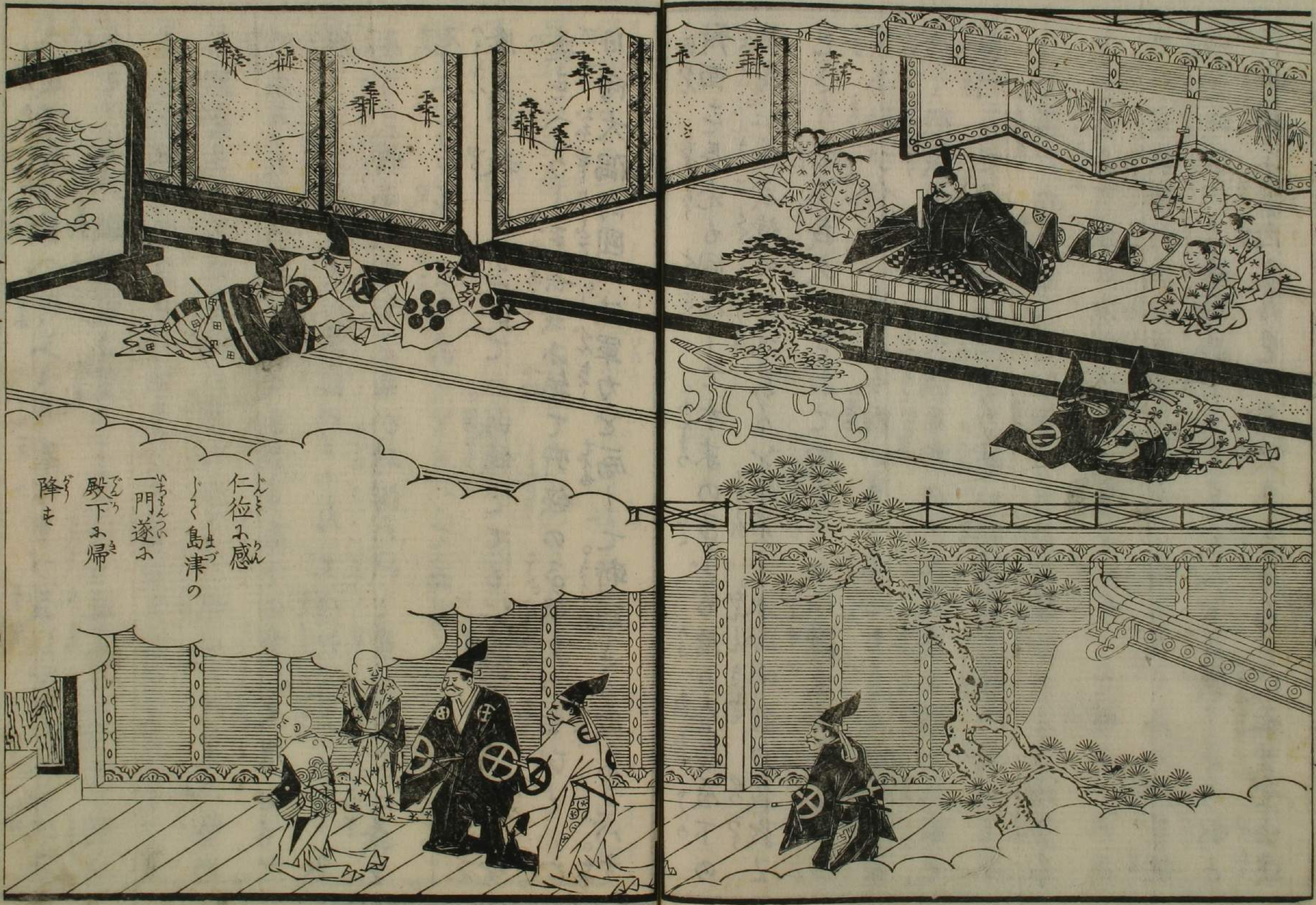
る殿下降服薩津諸軍凱陣属　新納独立
金ハ火に依て成り火ハ木に依て成り木ハ土に依て成
る。水ハ剛しく四行を養ふ天地の恩を返ふ時ハ与つに
ひとつもなし。然バ薩津義久ハ義徹長老に伴えぼ従者
五十人許を率て当殿下の御本陣太平寺に参り降参の
よしを言状しければ。秀吉公大悦ましく早速召出さ
せしかバ長老那地義久と伴ひ出感服のよしを子細に
演殿下義久を御覧ありて我四海の動乱を欲笑干戈を
止めて泰平なさしめんがさめ安く使節うろしむれど。
義久義弘武勇に慢ど。偏土とさのんで下知に応ぜず剰
他国へ軍馬を進め。万民を煩えしめ騒動禁て止ざる也

え。汝を征伐せしめんため此国まで下るところに。自方の先手の向ふ所戦勝ずといふ事なく幾日を経ざるに日向大隅薩广へ攻入郡まで攻遍るうへは麑児嶋の一城を乗取らんこと難からず。然ばとて嶋津家の武勇強ち弱しといふにあらねども天子の勅命を蒙り。天の順を地の理に和して征伐をなすべき軍なれば。いかでか我に勝ことを得んや。いはゞさかしく思ひ知つらん其身に違勅の罪はあれども罪科を宥免いたさすべし。原来名家と思へばなり。浩るうへは変心なく忠勤を励むべしと宣ひければ。義久初て秀吉公に謁する事なれば頭を挙て御面をよくよく見覚へたてまつらんとするとい

へども頭挙らず。上より押らるゝが如く匍々御顔を見上得ず。今こそ誠に秀吉公の尊き事を知りまいらせ。心中なにとなく恐怖なし只ありがたさに存じたてまつると御奉言してありけるにぞ。殿下重ねて宣ひけるは此度義弘は。いかなれば来らざるにや。遅参の条々心得がたし。我今これを察するに義久試に降参なし。我後中を捜りて后実に許さば義弘も降参なすべき企ならん。若許らずなば義久こゝに身命をもて奉るとも義弘堅く楯籠り。防戦をなすべき了簡ならん。然まで疑ふも無理にはあらねど。我も嶋津を亡ぼさんとの所存なかりし迷に軍馬を発し。一揉に攻潰さんに。なんぞ未練に人質を取徒になさん

と謗るべき。天下に政事を施すものは。然れど拙き謀略
はあるまじきぞ。家久は快喜彼せり。逢て実否を糺るべし
と。天眼通を得るが如き。作に義久まさしく感じ安し
に増れる英智の大将。此上は何とか包みまいらすべき。
上意のごとく大将とおもひ。まづ某老の身参陣すれ
ど。ありがたき仁義の御謀略。心術に徹して覚へつれば。
即時に子息を招ぎもなさん。御目見へ致させまつると。
おそるおそる言状すれば。秀吉公笑ませ給ひ。是一言
ともて四海を治む。何ぞ反否あるべきや。義弘を召よせ
よと。作にかくして書簡を認め。従者に命じて麑児島に
つかはさる。義久その夜は御陣に止り。上意に因て家久に

対面をす。長老も同座して。本末の事ども語り合。各殿下の
英才。仁義武徳の弘大なるを称美し。本心帰服の色現はれ
すなはち義久かさねて曰。殿下の御疎意なきを知り。
共に歓び合といえども。猶いまだ安心せざるは。島津家
代々所領せる薩摩大隅日向の三国。此度日隅を攻取れ。
薩州とても此地に迫より。然れば島津家相続の名のみに
して薩摩の半國などを領せん事は。最恥かしき次第な
りと。吟合て其の夜の更るも忘れ困談して暁れば又同月
廿八日。兵庫頭義弘来着す。之に随ふ面々には。伊集院
種島。町田。川上。伊勢。格山ほ三千余人を召倶しけり。頃と
御本陣に案内すれば。家久に命ぜられ門前まで出迎


仁徳に感じて島津の
一門遂に殿下に帰
降す

へ。殿下の御前へ伴ふ。ここに殿下まづ義弘と義久の次に座せしめ。御洞端厳に宣ふやう。汝が遅参も素より将たるものの思量所なれバ。あながち咎むるにもおよバず。これに疎意なき事の子細ハ家久によく訊ぬべしと。御懇の仰ありけるにぞ。父義久取敢ず殿下の寛仁大度をもて。精しく言上けれバ。義弘つゝしんで御礼言上られける。殿下三将に向はせたまひ。島津ハ代々勇将多く。仁義を厚ふする家と聞ゆ。されバもつて当する罪を宥免なし。降参を赦すにおひてハ。此後とても仁義を専にして変違すべからず。其義に就て所領のこと降参の習ひといひ。日向大隅両國ハ諸軍力を励して斬取たる國なれバ。その

侵切ある諸軍士へ。分与ふべき積なれども。島津家先祖累代の所領を他人へ与へんもいかゞなり。其上これまで大國を領せし家の。今更薩摩一國に縮められんも本意なからん。これに因て原の如く三州を返し与ふべし。もつとも義久ハ隠居なし。義弘家督たるべきなり。これ禁中への解料又ハ中務家久ハ兵庫頭義弘を補佐なし。國の政事の乱れざるやう。深切に沙汰すべしと御直に命を下されけるにぞ。三将ハ夢かとばかり限りもなき御仁恵骨肉に徹して。ありがたく御謝し。欣びあまりて落涙の。止め敢へぬも理なり。いまこそ豊臣家のおんため限りハ疎意なく厚恩を謝すべしと心に誓を立られける

り。其も秀吉公浅津家へ旧領を残りなく素の如く与へ
られしハ深き御神慮あつてのことなり。そぞろに記をべ
きになるぞこれに因て秀吉公めでたく御凱陣なるべ
しとて。その御用意をすみやかなり時に義久隠居なるべ
き命により其身も本意なりと悦び其地に鬚髪を剃除
して。隠号を龍伯と華め御礼より上洛なすべく堅く約
となしまからせ。秀吉公ハ片時も早く帰洛なすべしと陣
払ひ玉ひ。六月七日太平寺を御辭あつて山崎。宮城。霧田
とゐて蒼木の里へ出玉ひ天堂の尾といふところに。天坐
死せしものハ悉らくハ紫尾山の麓な のらん尾とら紫尾ハいづミ郡にして大口に近し
させ玉ふ時に。先隊の陣より早馬来り急を報じて言状

まろく大口に敵ありて要害の地を丈夫にかまへ先手
に進ミし御勢を遮え止めけるゆゑ是非なく合戦に及ぶ
ところに敵強くして通りがたくけと注進を殿下大に
おどろかせたまひ何者なれバ不敵にも吾凱陣の帰路
を遮るか其姓名を究問よと命ぜられけり。其も此敵ハ則
地新納武蔵守なり先日病をいひたて手勢を率し山
林に入り。世の動静を伺ふところに義久義弘まつさく
降参なしけるによりこれを拝憾き事におもひ吾九州
の勇士と呼れ。何ぞ阿容〻降るべきや。今ハ所詮討死
して名を末代に輝さんにと。地理ハ知より案内より大
口山の数所に出三千余人の強兵をもつて。堅牢に隊伍

と立各必死と覚悟を極め秀吉公の旗路を遮り。御旗本
まで突入らんと勢込で待懸たり。秀吉公の大軍は凱陣
の事なれば心をゆるし隊列緩々として大口なる切通
しまで出たる所に。新納武蔵守忠元上方勢の生膽を拉
ぎくれんと不意に起り先手の備へ突懸り。もつとも
必至の勇名なれバ猛憤日来に十陪して。百騎が一騎に
当りがさく剰不意を打されて。動乱すること大かた
ならぬ大軍僅倪になると武蔵守は雷笑なし吽宏地よ
きことどもかな此所にはやく退揚て敵の寇るを待べ
しと大口の殺所に退く。上方勢は大に怒り跑撤して通
らんぞと傑々の勇士数千人喚叫で攻登らんとす。然ど

も要崖堅固にして足場悪しきに自由を得ざれバ。攻径
で撃ゆる所へ。忠元あらそび下知をなし鉄炮数百を放懸
先手の名を四五十人右側左側に打殺しより殿下にも
らの注伸を子細に聆しめさせられ即時に義久義弘へ。
使節をもつて若干ひ名凱陣の旗路におひて武蔵守忠
孔をなせり撃捉んことは易しといえども。名誉の勇士
を失なわんこと最惜におもふなれバ。某方太守の命を
もつて宜しく帰服なさしむべしと仰出されけるに
ぞ。龍伯義久義弘はおなひにおどろき馬を飛せて新納が
方へ急使を遣り言しけるやう。義久も入道し義弘家久
共に降りて殿下の仁沢を蒙り。その外の国人ま

で質と出して國家の安泰原の如し。汝も共に帰降して。太平を仰ぐべしと道理をもつて宥るといえども武蔵守些も諾せず。討死の外他事なしと心を決せし返答に。義久義弘甚く困苦し。これはいかなる乱法ぞや。狂氣ぞしなしつるかと。覇るゝ事もなくなりしぞ。ふたたび使者をもて言越ゆう。いよいよ太守の令に背き殿下に敵しまいらせなば。島津家の滅亡今日にあり。汝が戦死を余所にみんより。我父子が手を卸し。汝が陣に切て入り。一旦殿下に降参しつれば。二心なき證據を顕し。快く一戦を遂。自害をすべしと思切たる所存をもうし送られければ。死を決したる武蔵守も。有徳譜代の臣されば。

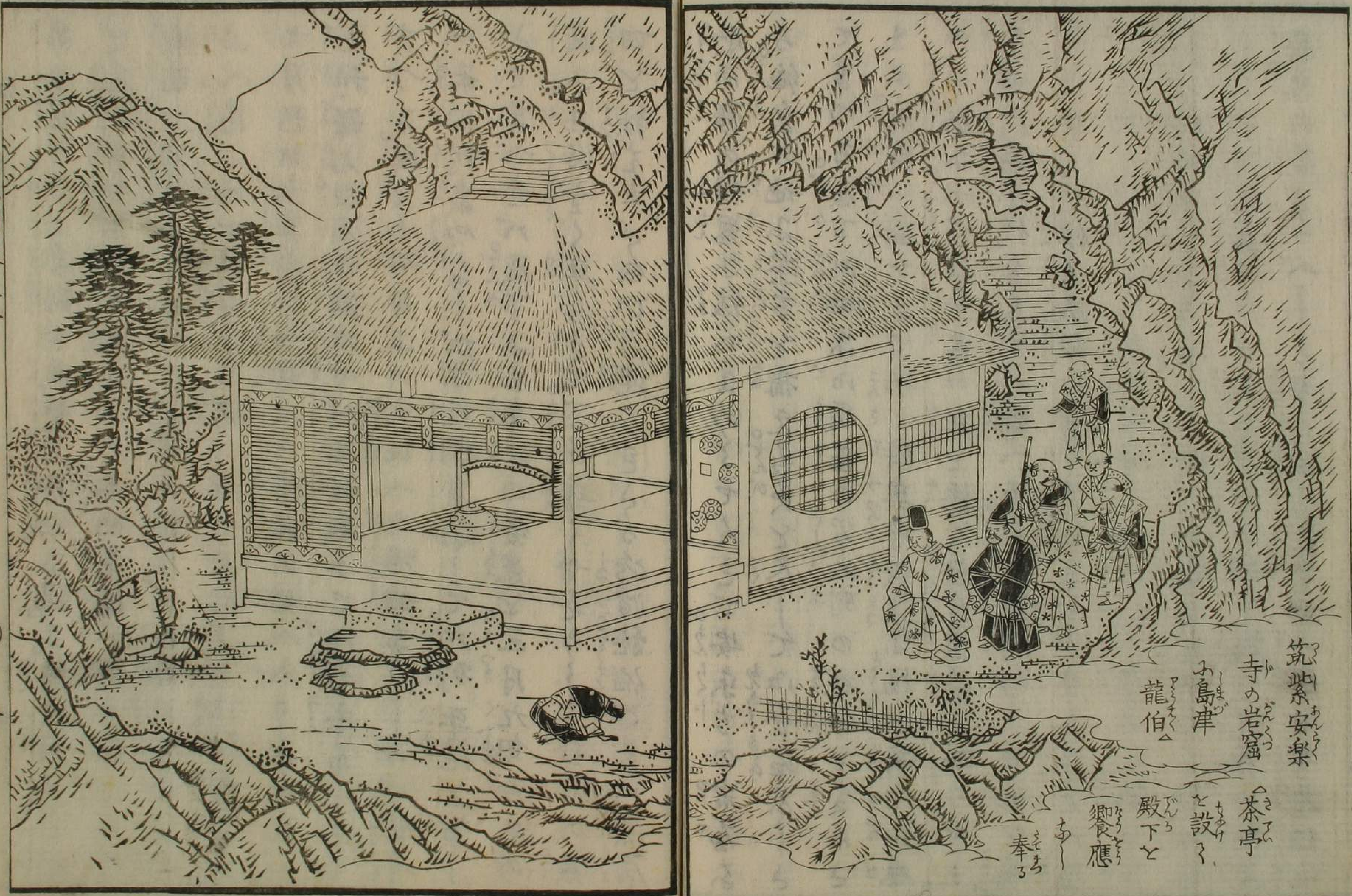
主人に敵對ありがたく。刹那や島津家滅亡の一言に心なくも是非なく降参つかまつるべしと義久義弘へ返答なし。次男新納大治郎忠氏を人質として殿下の御陣へ遣しけるゆゑ。義久義弘安堵なし秀吉公へ武蔵守が無礼を只顧謝罪もふしける

義弘瞋禁止國中一向宗属　上洛任官

廓として孤立して新を觀を塊として獨言して響を聴に彷徨する。新納武蔵守忠元も主命黙止に居なくして。遂に殿下へ降参なしければ殿下おおひに感じたまひ。新納が義勇比なかりしとしばしこれを御賞美ましく。天堂の庵を御辞あり大口山に到りさせ給ふに新納も御

送のさめ出迹ふ殿下御前へ召出されて天下無双の勇将なりとて御褒美として備前物の御太刀一口。これを賜り。仁義を施しさまひたれバ忠元初て喜悦なし。肥後國八代まで御供もうしさてまつりたり。それより殿下秀吉公にハ筑前太宰府まで急がせたまひ茲にて暫く御滞留あり勝跡ホを御見物あるうち。嶋津入道龍伯も此地に来仕なしけるが其日ハ六月十七日なり。いそぎ殿下の御陣へ参り。一門國人ホが子息一個づゝ人質として召倶し来り御供いたさせさきよしを言状志たれバ。殿下も殊に御感ましまし時に義久に盃許にて。御饗應をも申上ぜ殘念の山宿處を卻て切て紫海の珍味を調へ。

聊御饗の謝恩に彼へまいらせんとて安楽寺の岩屋なる絶景の地に茶亭を構え善美を尽して御饗應なしさてまつる。殿下此地に御逗留の間九州の配分を定めさまふ。肥後一國ともて佐々陸奥守成政に賜り。其内山鹿の一郡に水俣津奈木の庄を添て秋月宗吾に賜り。宇土。益城阿蘇小代合志ホの華へも三四百町づゝの地を賜り。これらを佐々成政の旗下に属させさまふことハ殿下の深き思召なり。筑後國三瀦山門下妻の三郡を立花左近将監宗茂に賜りて柳川の城に在住せしむ。おなじく三河守益時にも百五十町の地を賜り。宗茂の後見家老の長たるべしと令ぜ同國三池の一郡を高橋弥七


筑紫安楽寺の岩窟へ茶亭を設く
に島津龍伯へ殿下と饗應なし奉る

郎に賜り同上妻郡を筑紫上野助に賜り。筑後國上三郡と毛利秀包に賜り大友にハ本地豊後一國小早川にハ筑前一円豊前をもつて黒田に賜り。その外九州の侍人らへ悉く地を割分して宛へらる。それ〳〵御仕置相済。七月朔日太宰府を御辞ありて中國の地へ入りたまへバ。毛利輝元領國の路次中。此泊彼宿にて御饗應なしたてまつる。同月十四日にハ大坂へ御帰城ありしかバ。留守の前田利家等。ならびに諸将集参して九州平治を賀したてまつりけれバ。殿下にも年来の憂患を。三月九旬がその間に。西海全く平らぎて万民善くやすらかしむるの勲功と歓ばせ給ひ。召連られける嶋津龍伯これハ隠居の分なれバ。ゆるく都に逗留して労心を慰むべしとて。賄料に摂州能勢郡にて五千石。芳野村にて八百石。堅綿の庄を四千二百石都合一万石を賜りけれバ。龍伯居士ハありがたしとて恩を謝し。程も装束邸を造らせて。こゝに座臥を安からしめけり。さて又嶋津兵庫頭義弘ハ。本國に在て。王政正しく執行ふ。然るに此度義弘京泊に對戦の初。上方勢の閑乃より不意に乱入せられしこと。いと〳〵もつて意得がたし。最も関白秀吉公ハ。武略に神通不思議を得たる。大将軍に在せといえども。いかで薩摩の山岳海濱曲折螺乃の地理案内を居ながら知しめさるべき所謂なし。此事始終あつとて毎度穿議に

及ざりしが。獅々洞の門徒が導きせしよし。頗く露顕
に及んでり。是ハ其時寄手の軍勢獅子洞より打て出る
る由見え緊しく勘し査むるに。去年より光佑上人彼洞に
在せしが。合戦の時にいたり。太守へも告ずして薩丸を
退去せられしこと本丸を通らずして密に宗乃より
抜出られしものなるらん然バ獅子洞の門徒の中より案内
せざんバ出らるまじきに其根を糺さんとある機会一
狭卒がいふを聆に上方勢が義弘君の本陣へ攻入る初。
りの上人に給仕せし家老に似たる人ありて先に進ミ
て戦ひたりと告るものゝあるによりいよ〳〵怪しミ。
在場所ともじめとし獅子洞の門徒を召寄厳しく拷問、

せられしに遂に白状に及びしかバ。諸将おなじく憤怒
なし誠に國賊の挙止なり悉く誅をべしと罵りけると。
義弘ぎなく工夫ありて私に誅しなバ殿下の御遺恨
と為らんも量りがたし。いづれ誅戮をべけれども暫く
見合宜しく料簡思案ありとて京都に在住せらるる。
龍伯が許へ使者をもつてそぎの趣なるびに義弘の所
存を精しく密書に認め贈りしかバ龍伯これを閲見し
て甚気をつぶさに意得何となく殿下の御前に出四方
八方の物語などして御伽をいたされけれバ秀吉公も
御機嫌よく御酒宴を催さる其時龍伯拙者の連句に取
付。実に君ハ名道におひてハ。摩利支天の再来とも呼れ

たまふ。天然名智の大将軍にてまし〳〵けるが。よもや神通は得たまふまじきに乃士が國を攻させたまふ其初は。いかにして閑居より出て進ませたまひけるや。韓信陳蒼道より軍勢を出して楚を襲といえども。これも張良が心彼より出るなり。我國山河の經所におひては。他國の人の知らざる路あり。それを自在に窺求めて。軍を進めたまひし事。実に天神の所為とこそ存じはべれ。後学の為にいえば。此智略の程仰せきかせも下さるべしと笑を含て訊ねまゐらせし。殿下も辞に譲じたまひ掌拍て大笑あり。天地の間の事におひて案内なくては通じがたし。謀計を先にし。戦闘を後にするは軍慮の心法。その先謀の手

使こそ斯く如くなりけりと。光佐上人の始終獅子吼の徒の事までも。語り聞せたまひければ。義久はじめて覚悟を得。天晴大智にひらけぞと感服して。此旨を退去。此許をいと委しく。義弘の方へ通告しければ。義弘返書と一覧して。今こそ國賊を誅すべしとて。獅子吼門徒及城房等をことごとく磔しける。依國中の四民に徇て。一向宗を停止せられければ。此由を早くも殿下の御聞に達しければ。御機嫌もつとも宜しかりぞ。龍伯を召寄られ。いつぞや某方に薩摩攻の謀計を物語せし事ありしが。汝自国へ指図せしにや。義弘今度獅子吼門徒を悉く誅し。國中の一向宗とば停止せられしと聞。これも秀吉に

浅からんと宣ひけるを。入道龍伯是も怒る気色な
く。上意の如く吾先達て自國へ通じいえども。成敗は義
弘の了簡あり。此事をぞ本國許にして露顕に及びし也。
え義弘之を密に通書を出し。実否を殿下へ披閲まいらせ。
明白にせんと言訳より。それをもて御伽話の次第に。御尊
ねまいらせしは。怒もながら老夫が心計を明白に聞
義と存ふは。御慮とこそ存ざるなれ。縦令國にて聞る
るとも。君の御咎お忘しまさば。浩る成敗は做まじ
きものと。明かに上意ありつる故に。その趣を言遣りし
に。義弘さてい御遠慮なるど。停止いさせしものならん。
此上は義弘を御召あつて御たづねましをべし。非通

の大将軍にはおはせども。某士の一言に欺るゝをさなひ
しは。君の御謀にいらせるゝぞやと憚る所なく言状しけるを
ば。殿下もこれに閉口させ給ひ。忠言大敵とは此事にや
と御感をあつて。始終を御尋ましまさんため。義弘を御
召ある。兵庫頭は原来義弘の事なれば。上意に従ひ上洛
せらる。是翌る年の六月なり。義弘頓て用意せし。金磨に
志さる傑柱二本正光に荷をせ馳登り。同六日に京都
へ着き。此時殿下は入洛ましまし。聚楽に在しましける
也。兵庫頭も彼城に参候て執奏をもて言状しければ。
早速御前に召出され。とづくら門徒の像くと御訊ねお
ましまき義弘謹で演らるゝは。全く遺恨などを含く門

徒を停止せしになるぞ。國政乱れざらんやうに。斯は拙劣にあり。先年御征伐の砌に至りては。主従いとく危ふかりしも。羽柴殿下の御仁慈によつて國家まつたく安きに至る。倫乃も亦き君におゑさば。群倫いかでか安途を得んや。倹修羅國の鬼となりて。万劫の苦に沈淪しぬらん。然れる則べその佞咎は都て。獅子將の門徒に出づ。原来渠們獲ろの國内に毒蛇を畜益なから。國土の恩を忘失して。かのまた國を亡ぼさんとは。獅子身中の虫といふべし。活る残逆とその侭に置ば。後来の悪従ことを並鑑法主にいかなる讐とやなさらん。其も名後世料識られぞ。國政条れんことを恐れて。厳法度を整しそべりぬ。

然る咱們こそがさめに。御罷料を蒙ること。是非もなき次第なり。一端帰降しそべる軀は。邪使其居家の居にし有れば。聊居命に背くべからず。這故に御招の御旋と共に上洛つかうまつりては。期有際には鄙怯の挙止もあらん歟と。他の疑猜もうしろめたく。諫る心の證にとて家来る物の心。窮えさせよと脊既を賜欽。近侍に其意を通ずれば。預て窕く擒へせさる。那両株の磔柱を庭上に仗へさる。殿下これを御覧ありて。叶此品はなんのさめぞと宣ふを。然は成敗は法國禁忌の法度を整せに有ねども。其縁故をもて招さるる義弘殿下の御為に関乃と。御牽引せし獅子將門徒を誅戮せし罪一條。おなじ縁

故と咎として一向宗旨を停止せし。這罪二條あるとも
て。其念を生起まゐらせ罰せられん覚悟にて。斯の如く
準備しはべる。廢義ハ義久義弘島津家を相續で。日薩隅
の三國に主たり。凡刑の縡弁言にあらざれ。吾等が最初の
素懐に這柱上に梟られんことをこそ希ひしも。殿下備に
聞しめされ義弘の義膽を感じたまひ嗚呼勇あり信あ
り招に応じて変從せず覚悟を決して上洛せしハ。実に
大丈夫と謂つべし予に背かざる誠心現て満足せりと。
いとゆるふの賞美あり。いさゝか咎あふして却て御
感激のあまり義弘を従三位宰相に叙任せられ羽柴の
氏許容されしかバ。義弘ハ面目を施し。殿下の仁恩に感え

佩し欣く然として帰國せしハ。未曾珍しき名家にこそ

絵本豊臣勲功記九編巻之八了